

○梶山幹司・山並篤史・三原順一
(熊本農研セ)

【目的】

熊本県では、ニガウリ単作の他、メロンやスイカの後作として、作付面積はやや増加傾向にある。一方、近年本県のニガウリつる割病の被害は拡大傾向にある。他県では、接ぎ木栽培により本病害を回避して、知見が得られているが、本県での知見は少ない。そこで、本県の主要作型である半促成および抑制作型において台木の種類が県育成ニガウリ品種「熊研BP1号」の生育、収量等に及ぼす影響を検討する。

【材料および方法】

穂木の品種は「熊研BP1号」用い、台木はカボチャ「新土佐1号」へチマ「ともだち」を用い、作型は半促成作型（定植：2010年2月19日・収穫：4月21日～7月31日、定植：2011年2月21日・収穫：4月25日～7月31日）および抑制作型（定植：2009年7月30日・収穫：9月5日～11月30日、定植：2010年8月6日・定植：9月12日～11月30日）である。自根を対照として各台木栽培と比較した。接ぎ木方法は、断根片葉接ぎで行った。栽植様式は、畝幅2.5m、株間1m、1条植えて、親づるを6節で摘心し、子づる3本をアーチパイプに誘引する仕立て法で、4節に1果の割合で人工授粉を行った。施肥量は(kg/a)はN, P205、

K20をそれぞれ3.1～3.5, 2.4～2.9, 2.5～2.9で1区3株の2反復で試験は実施した。

【結果および考察】

台木の種類および作型の違いに関わらず、活着は順調であった。生育については、初期は、自根に比べて「新土佐1号」では、生育は旺盛であったが、「ともだち」では半促成作型で年次間差がみられた。後期は着果状況により異なり、台木間差は判然としなかった。雌花節率については、台木および作型の差はなかった(第1表)。また、栽培の終了時の根域については、「新土佐1号」は、自根に比べて根域が狭かったのに対して、「ともだち」は根域が広く深かった。

果形については、台木および作型に関わらず、果長・果径および外観はほぼ同等であった(第2表)。

収量については、半促成作型では、「新土佐1号」は自根と同等の収量を確保できたが、「ともだち」は10～15%減収した。抑制作型では、自根に比べて「新土佐1号」では6～29%、「ともだち」では2～7%増収した(第1図)。

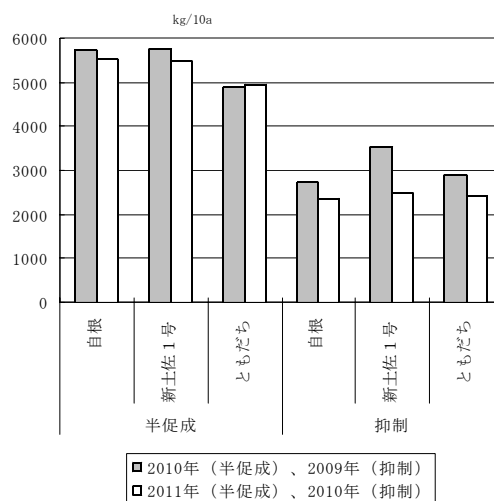
以上の結果から、台木については、半促成作型では、自根と同等の収量を確保でき、抑制作型では、自根に比べて増収するカボチャ台木「新土佐1号」が有望であると考えられた。

第1表 半促成、抑制作型における生育および雌花節率

		2010年(半促成) 2009年(抑制)			2011年(半促成) 2010年(抑制)		
		葉身長	葉幅	雌花節率	葉身長	葉幅	雌花節率
		cm	cm	%	cm	cm	%
半促成	自根	11.8	16.3	42	21.8	29.9	50
	新土佐1号	12.7	18.6	47	23.7	33.5	53
	ともだち	13.4	19.6	40	23.5	30.7	49
抑制	自根	15.7	24.1	42	11.8	16.3	63
	新土佐1号	17.2	26.8	46	12.7	18.6	58
	ともだち	17.4	27.0	45	13.4	19.6	63

第2表 半促成、抑制作型における果実の形状

	半促成			抑制		
	果長	果径	果形比	果長	果径	果形比
	cm	cm		cm	cm	
自根	25.5	5.3	4.8	24.5	5.4	4.5
新土佐1号	25.6	5.3	4.8	24.8	5.4	4.5
ともだち	24.6	5.3	4.6	25.0	5.4	4.6



第1図 半促成、抑制作型の可販果収量